

## 岡倉天心の『茶の本』に関する一考察

北京外国語大学 北京日本学研究センター 院生

葉 晶 晶

『the book of tea』（『茶の本』）は岡倉天心により書かれ、1906年5月にニューヨークのフォックス・ダフィールド社より出版された英本である。『東洋の理想』（『the ideal of the East』、1903）、『日本の覚醒』（『the awaking if Japan』、1904）とともに岡倉天心の「英文三部作」と言われた名作である。その影響は欧州にまでおよび、フランス語、ドイツ語にも訳出されてその名声は全西欧に広がった。日本で出版されたのは、岡倉天心没後17年目の昭和四年（1929年、岩波文庫、村岡博訳）であった。『茶の本』では、東洋や日本の文化を伝えるのに茶や茶道を取り上げ、日本と西洋との美の捉え方を比較して、西洋に決して劣らない自然と調和した美を追求する日本人の美意識について主に言及している。

日本近代の美術教育家として、生涯日本の伝統文化・芸術の復興と発展に力を尽くした岡倉天心は、美術分野における功績を研究・評価されることは多い。先行研究では、『茶の本』の影響について、特に茶が芸術であり、美術であり、美であるという主張が昭和以降の茶の湯論を方向付けた点が強調されている。そのため岡倉天心は、茶の湯に強い関心を持った人物として印象付けられてきたと言える。しかし、岡倉天心と茶の湯の直接的な関係に疑問を投げかけた研究者もいる。例えば、田中日佐夫氏は、「その生きざまの人物像と、彼自身が書く茶の世界とはどうもびたっと一致しないのである」と指摘し、破天荒な逸話で知られる岡倉と、茶の湯を直接結び付けることには抵抗があるという違和感を表明している（「近代における茶道と美術」『茶道聚錦』第六巻、淡交社、昭和60年、p146～147）。さらに、2006年に開催された岡倉天心国際シンポジウム『茶の本の100年』において、熊倉功夫氏も同じような見解を述べている（「茶道論の系譜から見た『茶の本』の異質性」『茶の本の100年』小学館スクウェア、2006年、p90～107）。

このように見ると、世間の一般的なイメージと違い、岡倉天心は必ずしも茶の湯に親しいわけではない。そもそも、岡倉天心はなぜお茶に関心し、それを本のタイトルとして取り上げたのか。『茶の本』には、どのような茶道観が見られるのか。本論文では、先行研究であまり見られていない天心の茶道観及びその形成原因について、『茶の本』が書かれた時代背景や天心の生涯を辿りながら検討しようとする。